



## 目次

■ あらすじ (プロット) .....	4
■ 登場人物 .....	5
■ 第1幕 .....	6
○ 都内 渡辺一家 マンション リビング (夜) .....	6
○ 電車の高架下付近の道路 (夜) .....	7
○ 電車内 (夜) .....	7
○ 繁華街 (夜) .....	7
○ 塾 教室 (夜) .....	7
○ 塾 外 (夜) .....	7
○ 繁華街 (夜) .....	7
○ ゲームセンター (夜) .....	7
○ マンションの一室 (夜) .....	8
○ 【ゲームパート】 渡辺家のマンション内の探索 マンション内 .....	8
○ 【ゲームパート】 マンションからの脱出 マンションの一室 (夜) .....	10
○ マンションの廊下 エレベーター前 .....	10
○ 公園 (夜) .....	10
○ 門脇の車 .....	11
○ 【ゲームパート】 車両発進1 門脇の拳銃を見つける .....	12
○ 【ゲームパート】 ET2銃撃 ET2の8本の足を射撃する .....	13
○ 【ゲームパート】 車両発進2 自動車をバックさせる .....	13
○ 【ゲームパート】 車両発進3 自動車を発進させる .....	13
○ 【ゲームパート】 逃走 外務省に向かう .....	14
○ 外務省 (夜) .....	14
■ 第2幕 第1場 .....	14
○ 外務省 エントランス (夜) .....	14

○ 外務省 エレベーター内(夜)	15
○ 外務省 フロア8 廊下(夜)	15
○ 外務省 フロア8 情報局オフィス(夜)	15
○ 【ゲームパート】 ET2戦 外務省オフィス編	18
○ ET2戦闘パターン1	18
○ ET2戦闘パターン2 8本足歩行	18
○ ET2戦闘パターン3 8本足銃撃1	18
○ ET2戦闘パターン4 8本足銃撃2	18
○ 【ゲームパート】 ET2戦 外務省廊下編	19
○ 外務省 階段 (夜)	19
○ 【ゲームパート】 ET2戦 外務省エントランス編	19
○ 【ゲームパート】 ET2戦 外務省中庭編	20
○ 【ゲームパート】 外務省 外務省エントランス編2	20
○ 外務省 物置部屋 (夜)	21
○ 外務省 業務用エレベーター (夜)	21
■ 第2幕 第2場	21
○ 地下道(夜)	21
○ 地下施設 出入り口(夜)	24
○ 地下施設 面会室	24
○ 都内地下施設 面会室(夜)	25
○ 【ゲームパート】 ET1戦 地下施設編	27
○ パターン1	27
○ パターン2	27
○ パターン3	27
○ 地下通路(夜)	27
○ 東京タワー近くの広場(夜)	28
○ 東京タワー 建設作業員用入口	28

○東京タワー 先端付近の鉄塔	28
○東京タワー 展望台	30
○【ゲームパート】夏海戦 東京タワー展望台編	31
○地下施設 面会室(夜)	31
○地下道(夜)	32
○列車墓場(夜)	35
○【ゲームパート】ET2戦 列車墓場編	36
○パターン1 8本足通常歩行	36
○パターン2 2本足ベア素敵&銃撃	36
○パターン3 本体歩行&全方位監視	36
○パターン4 本体のみ行動	37
○パターン5 本体のみ行動+透明化	37
■ 第3幕	38
○地下通路 東京タワー付近に出る梯子(夜)	38
○東京タワー近くの広場(夜)	38
○東京タワー展望台	38
○【ゲームパート】洋一戦 東京タワー展望台編	39
○洋一戦後 東京タワー展望台	39
○東京タワー 建設用階段	40
○変態後の夏海の体内	40
○東京タワー 建設用通路	42
○東京 東京タワーを俯瞰する視点(夜)	42
○東京タワー 建設用階段	42
○東京タワー展望台	42
○東京タワー 出入り口	42
○【ゲームパート】東京タワー 出入り口 誠に擬態した ET2戦	43
○東京タワー 出入り口 誠に擬態した ET2戦後	43

■ あらすじ（プロット）

深夜、塾から自宅に帰ってきた誠のスマートフォンに、母の夏海からヴォイスメッセージが届いていた。それは警官の姿の男に誘拐されたという夏海からの SOS だった。「もしかしたら、家に警官が来るかもしれないが、出てはいけない」と夏海は言った。そして「父、洋一は仕事でいないから、洋一の上司である若島という男を頼れ」と言った。直後、家に警官がやってくる。警官はなぜか家の鍵を持っていて、中に入ってくる。誠は自宅から脱出し、公園に逃げ、若島に電話をかけた。若島は、門脇という秘書を公園に手配した。誠は、門脇とともに、若島のいる外務省へと向かうが、さきほどの警官が襲ってきて、門脇が死亡する。直後、警官の体から触手が生えてきて、誠に襲い掛かる。誠は何とか逃げ切り、外務省に到着する。そこで若島と合流する。若島が、誠の父である洋一は地球外生命体に関する調査を行なっていたことを明かす。また、現在、洋一とも連絡が取れないことも伝える。洋一は、先日の沖縄県で起きた米兵の婦女暴行事件の調査のため、沖縄から、都内の地下施設へ移動したのだった。事件を起こした米兵は地球外生命体に乗っ取られていて、その対応のためだった。誠と若島の二人は、事件の真相を確かめるために、洋一がいる地下施設に向かうことにする。若島が準備をするためにオフィスから出ていく。そのとき、夏海からメッセージが届く。内容は、警官をよこしたのは洋一の仕業で、洋一が何か悪いことを企んでいるのとのことだった。誠は夏海のその言葉を信じるが、このときすでに夏海は地球外生命体に乗っ取られており、誠が父を殺すように誘導していたのだった。誠はそれに気がつかず、夏海の言葉を信じてしまう。そのすぐあとに父からのメッセージが届く。「家に警官を呼んだから、警官の指示に従ってくれ」と。誠は、これで、父が自分と母を殺そうとしているのだと確信してしまう。そして、母を助けるため、父を殺そうと決意する。しばらくすると、オフィスにまた例の警官が現れる。誠と警官は死闘を繰り広げる。誠が殺されそうになったところを、若島が助け、二人は地下通路に入る。地下施設に入ると、施設は荒れていた。二人はさらに奥に進み、取調室に入ると、そこには米兵の死体が横たわっていた。じつは数時間前、取調室に洋一らがいたのだった。洋一はそこで妻の夏海が誘拐されたことを知った。取り調べを終えようとしたとき、地球外生命体が逃げ出してしまう。洋一は地球外生命体を追いかけて、地下施設から地下通路へ、そして東京タワーへと向かっていった。ついに、洋一は地球外生命体を追いつめる。地球外生命体は、かつて洋一らが、自分の仲間で実験したことに恨みを持っていた。だから、夏海を誘拐し、同じ感情を洋一に抱かせようとしていたのだった。洋一は、地球外生命体から夏海の居場所を聞き出し、射殺する。洋一が夏海がいる東京タワーの展望台に向かうと、夏海は地球外生命体に乗っ取られていて、洋一を襲った。洋一は、仕方なく夏海を殺害する。そして、誠に「展望台に来てくれ」と連絡をした。誠たちは、東京タワーに向かうとするが、途中、地下通路が崩れて、列車墓場に落ちる。そこに、警官が現れる。誠は、死闘を繰り広げ、今度こそは警官を仕留める。そして、東京タワーへと向か

う。展望台についたとき、誠は入り口の扉を閉めて、若島が入って来られないようにする。展望台には、洋一と、倒れている夏海の姿がある。激昂した誠は、洋一を銃撃する。洋一は誠が地球外生命体に乗っ取られていると勘違いし、反撃をする。誠が、洋一を倒す。若島が入ってくる。倒れていたはずの夏海が起き上がり、背中から触手を生やして、東京タワーの外に出ていく。洋一、誠の手を握り、誠が地球外生命体に乗っ取られていないことに気がつく。そして、洋一は、地球外生命体が、自分を殺そうとしていたのだということに気がつく。誠、夏海のあとを追って、展望台の外を出る。東京タワーの頂上に、変態した夏海である巨大な蛸が張り付いている。触手が伸びてきて、誠が蛸の体内に入ってしまう。蛸の体内には夏海の姿があった。夏海は、自分が体に乗っ取られていて、洋一が悪い人間に見えるように、誠に嘘をついてしまったことを明かした。ここで、誠は、誤って洋一を殺してしまったのだと気がつく。誠は、母を助けようとするが、夏海の体は蛸と一体になっているのだった。誠は、蛸の体内にナイフを入れる。それに合わせて、夏海のお腹からにも切り傷ができる。誠は、深くナイフを入れ、蛸の体内から脱出する。そして、意識朦朧しながら、東京タワーを降りていく。地上に戻ると、誠は自衛隊に囲まれる。そして、内閣総理大臣が誠の元にやってきて、手を差し出す。誠は総理大臣の手を握ると、違和感を覚えた。内閣総理大臣は地球外生命体に乗っ取られていたのだった。総理大臣は擬態化したET2と対決するチャンスに誠を与えた。誠はET2を撃退する。しかし、最後は、自分自身に銃口を向けるのだった。

#### ■登場人物

渡辺誠 .. 主人公。 18歳。男。 高校3年生。  
渡辺洋一 .. 誠の父親。 47歳。 外務省の地球外生命体の諜報活動を担当。  
渡辺夏海 .. 洋一の妻。 42歳。 若島と不倫関係。 かつて若島の秘書だった。  
若島守 .. 洋一の上司。 52歳。 男。 外務省情報局局长。  
門脇伸二 .. 若島の秘書。 36歳。 男。  
ET1 .. 地球外生命体。 沖縄県アメリカ軍基地の兵士の体に乗っ取る。  
ET2 .. 地球外生命体。 警察官の姿に擬態して誠を執拗に追う。  
ET3 .. 地球外生命体。 夏海の体に乗っ取る。  
総理大臣 .. 内閣総理大臣。 62歳。

■ 第1幕

○都内 渡辺一家 マンション リビング (夜)

夏海 (42歳、女、誠の母)、せわしなく動き回っている。

誠、リビングのソファに座ってスマートフォンを操作している。

(この場面では、夏海と誠は一回も目を合わせない。このことで、すれ違う家族を予感させる)

夏海「お父さん、今日も遅いんだって」

誠「いつものことですよ」

夏海「今日、塾の日だね？」

誠「そうだよ」

夏海「お弁当作っておいたから、夕ご飯にして」

誠「了解」

夏海、鏡を見て、ピアスをつけている。

夏海「お母さん、今日は用事があるから出かけるね」

誠、立ち上がって、引き出しの中を見ながら(この時、夏海と誠は背を向けあっている)

誠「いつものことですよ」

夏海「あのね、お母さんだって用事くらいあるの」

誠「そうだね」

夏海「塾終わったら道草しないで早く帰って来なさいよ」

誠「わかってるよ」

夏海「じゃ、お母さん、行くからね」

誠「行ってらっしゃい」

誠、うつむいてスマートフォンを見ている。スマートフォンには洋一(47歳、男、誠の父)から次のようなメッセージが来ている。【今日は帰れないかもしれない。お母さんによろしく】

○電車の高架下付近の道路 (夜)

誠、やや俯いて道を歩いている。電車の高架下を歩く。高架線に電車が走ってきた時点でゲームのタイトルを出す。

○電車内 (夜)

誠、つり革につかまって、外の風景をぼうつと眺める。

○繁華街 (夜)

誠、繁華街を歩く。

ビルの宣伝用のテレビがニュースを報道している。

ニュース「先日の米軍兵士による女性暴行事件におきまして、日本政府はおととい、沖縄県のアメリカ軍基地に調査団を派遣し、事件の経緯などを調べるとともに、再発防止策などについて、協議しました」

誠、それに目もくれずに歩く。

○塾 教室 (夜)

教室は煌々と蛍光灯の白い光が照っている。

誠、退屈そうに授業を聞いている。

○塾 外 (夜)

塾生たちが「お疲れ」などと言いながら帰っていく。

誠、一人で塾から出てくる。そのまま帰路につく。

○繁華街 (夜)

誠、ゲームセンターに入る。

○ゲームセンター (夜)

誠、タバコを吸いながら、インベーダーゲームをしている。タバコをもみ消す。

警察官がやってきて誠の肩を叩く。

警察官「ちよっといいかな」

警察官、火が消えかけているタバコを一瞥する。



警察官「君のタバコ？」

誠、タバコを一瞥する。

誠「前の人のだと思えます」

警察官「そうか（2、3秒ほど沈黙する）。ところでもう遅い時間だ」

誠「はい」

警察官「そろそろ家に帰りなさい。子供がぶらぶらしている時間じゃないよ」  
誠「わかりました」

誠、ゲームの途中だが、そのままゲームセンターから出ていく。

警察官、ゲームセンターを出ていく誠の姿を最後まで目で追う。

インベーターゲームは宇宙人に攻撃されてゲームオーバーになる。

警察官が無線機を使って何かを喋る。

## ○マンションの一室（夜）

誠「ただいま」

と、小さな声で言い、家に入る。そのままリビングに向かう。

誠の声「母さんのバッグがない。まだ帰ってきてないのか」

誠、ため息をついて、ソファの上にバッグを置く。そしてお風呂場に行く。洗面台で顔を洗って、鏡に映った自分の顔を見る。顔を手でさする。

誠の声「僕は生きている。確かに生きている」

カメラが鏡の後ろ側に回って、誠の顔を正面にうつす（誠が鏡（Ⅱプレイヤー）に向けて、話しかけるというギミック）。

誠、後ろを向き、次のゲームパートに移る。

## ○【ゲームパート】渡辺家のマンション内の探索 マンション内

クリア条件…リビングに入ること

家の中が探索可能になる。探索可能な部屋は次の通り。また、各部屋に移動したときに誠が独り言を言う。

- ・ 洋一と夏海の寝室…「母さん、今日も遅いな。親父は、また出張なのか」
- ・ 洋一の書斎…「親父がどんな仕事をやっているのか俺は知らない」
- ・ 誠の部屋…「受験が近くなってきたな…。いやだな」(心拍数上昇)
- ・ 脱衣所…なし

リビングに入ると、スマートフォンに母からボイスメッセージが来ている。

夏海の声「(泣きながら) 誠、よく聞いて。母さんはもうだめかもしれない(鳴き声をあげる)。警察官の格好をした人に誘拐されてしまったの。今どこにいるのかわからない。誠、あなたは無事ね？もしかすると家に警察官が来るかもしれない。けれど、絶対に出てはダメ。逃げて。捕まらないように逃げてちょうだい。どこかに身を隠して。そうだ。このことを若島さんに伝えて。お父さんの上司。あなたもあつたことがあるわね？きつと信頼できるはず。電話番号は、~~XXXXXXXX-XXXX~~よ。若島さんを頼りにできるはず。お父さんは出張中で近くにいない…。(物音がしてボイスメッセージが終わる)

誠の声「何だ？何が起きてる？」

家のチャイムが鳴る。

誠、カメラの映像を見る。カメラにはET2 (警察官の体に乗っ取った) が写っている。再度、家のチャイムが鳴る。

誠の声「どうする？」

チャイムの音が鳴り止まない。

誠の声「どうすべきなんだ？どういうことだよ？」

誠がふと我に帰ると、チャイムが鳴り止んでいることに気がつく。そして、玄関のドアをノックする音が聞こえる。誠、忍び足で玄関まで向かう。

ET2の声「警察です。近くの交番からやってきました」

誠の声「どうやってマンションに入ったんだ？そうだ、若島さんに電話。若島さんに電話…。」

誠、手を滑らせてスマートフォンを床に落とす。

ET2の声「いるんですね」

床に落ちているスマートフォンに電話がかかって来て、バイブレーションになる。  
誠、スマートフォンを拾い、電話を切る。

ET2「入ります」

玄関のドアの鍵が開く音がする。

誠、リビングに駆け込む。

誠、とっさに、台所にある包丁を取り、ソファに隠れる。

### ○【ゲームパート】マンションからの脱出 マンションの一室(夜)

クリア条件…玄関からマンションの一室から出ること  
攻略方法…戦闘はできない。物陰に隠れて、ET2の視界に入らないようにする。

#### ○マンションの廊下 エレベーター前

誠、エレベーターを待っている。

マンションの部屋の中にいるET2が、何か気配に気がついて、立ち止まる。そして、玄関から出て行き、エレベーターに向かって走り出す。ちょうど誠がエレベーターに乗り込むところが見える。ET2が銃を撃つ。

誠、エレベーターに乗り、間一髪のところまでET2から逃げる。

#### ○公園(夜)

誠、近くの公園に逃げ込み、若島に電話をかける。

誠「もしもし、若島さんですか？」

若島の声「そうですが、そちらは？」

誠「誠です。渡辺洋一の息子です」

若島の声「渡辺君の息子？ いったいどうして・・・」

誠「母があなたに連絡しろって。それで、その」

若島の声「落ち着いて」

誠「すみません」

と言って、息を整える。

誠「母が誘拐されました。犯人は警察官の格好をしているようです。それで、ぼくを警察官の格好をした人が捕まえにくるかもしれないから、逃げろと」

若島の声「お母さんがそう言ったんだね？」

誠 「はい。それで、警察がうちに来たから、逃げてきたんです。そしたら、撃ってきたんです。その警官」

若島の声 「撃ってきた？」

誠 「そうなんです。それで、僕はどうすればいいのか・・・」

若島の声 「そうだな・・・。いったん、合流しよう。君はいまどこにいる？」

誠 「(少し躊躇して) 住んでいるマンションの北にある公園にいます」

若島の声 「私は今、外務省にいてな。事情があって手が離せない状態だ。しかし、君の安全を考えると、一度どこかで落ち合ったほうがいいだろう」

誠 「ええ。あの、親父は？」

若島の声 「実は君の親父さんとの連絡が途絶えてしまった。・・・とにかく、今いる地点をSMSで送ってくれ。もう電車もないだろうから、私の秘書をそちらに手配しよう。門脇というものだ」

#### (時間経過)

公園沿いの道路に黒塗りのセダンが停車する。男が車から降りてくる。

誠、物音がした方を振り返って、男を見る。

門脇(男、36歳) 「誠君、ですか？」

誠 「そうです。」

門脇 「若島の秘書の門脇です。若島からお話は伺いました。ここで長話するのも危険です。まずは車に乗ってください。外務省に向かいましょう」

#### ○門脇の車

門脇、ナビをセットする。誠は無言。

門脇、誠の顔をちらっと見て、

門脇 「大丈夫？」

誠 「大丈夫じゃないっす」

門脇、車を発進させる。

門脇 「警察官が撃ってきたんだって？」

誠 「そうです」

門脇 「君、何したの？」

と言って、笑う。

誠 「(うんざりしたような顔で) わかりません。ただ、とにかくトラブってます」

門脇 「ああ、きっとそうだろうね」

誠 「親父は、今なにをやっているんだろう？こんな時に」

門脇「君の気持ちもわかるけど、忙しい部署だから。君のお父さんのいる部署は、機密事項も多くて、外部との接触に厳しいんだ」

誠「(黙っている)」

門脇「君の後ろ姿、ちょっとお父さんに似ていたな」

誠「(無表情で) そうですか」

門脇「将来は外交官？」

誠「何にも考えていないんです、将来のことは」

門脇「まあ、焦ることはないさ」

誠「あの、そんなことより」

門脇「どうした？」

誠「僕が助かったのは良いんですけど、母が・・」

門脇「聞いたよ。きつとなんとかなるさ」

門脇と誠、沈黙する。

十字路に差し掛かったところで、パトカーが飛び出してきて、誠が乗っている車がパトカーと衝突する。門脇、頭を押さえながら呻く。誠、眠るように気絶している。門脇、誠をゆすって目を覚まさせる。

門脇「おい、大丈夫か？」

誠「(少し顔を歪めて) 大丈夫です」

前方から、ET2が歩いてくる。

誠「(指をさしながら) あいつだ。あいつが・・・」

ET2、門脇の頭を銃で打ち抜き射殺する。

## ○【ゲームパート】車両発進1 門脇の拳銃を見つける

クリア条件…一定時間内に、門脇を車外に押し出せる状態にする

一人称視点になる。視点は助手席に座っている誠。運転席の門脇が邪魔になっていて、ブレーキを押すことができないので、門脇をどかせる。

時間内にクリア条件を達成できない場合はゲームオーバー。視点を死体やハンドルなどに合わせると、オブジェクトをハイライトする。そのとき、丸ボタンを押すと、アクションを起こすことができる。次の順序でアクションを起こすことで、門脇の死体を車外に出すことができる。「ベルト」↓「運転席のドア」↓「門脇の死体」。

誠、門脇の死体を外に蹴り飛ばそうとした際、門脇の腰のあたりから拳銃（コルトガバメント M1911）を見つけ、取る。

○【ゲームパート】ET2銃撃 ET2の8本の足を射撃する

クリア条件…弾を一発でも当てるかすべての弾を撃ち尽くす

こちらに向かってET2が歩いてくるので、射撃する。  
弾（7+1）を撃ち尽くすと、強制的にゲーム終了（ゲームオーバーではない）

○【ゲームパート】車両発進2 自動車をバックさせる

クリア条件…自動車をバックさせる

ET2、背中から8本の足を出す。

誠がやばいと感じて、門脇の死体を蹴り飛ばして、車外に出し、運転席に座る。  
誠の声「バックして逃げなくちゃ」

再び一人称視点になる。プレイヤーはカメラを動かして、ハンドルやエンジンのキー、シフトレバーなどに視点を合わせることができる。所定の手順でアクションボタンを押すとクリア。時間内にクリア条件を達成できない場合、ゲームオーバー。

誠の自動車が猛烈なスピードでバックし（道は坂になっている）、T字路の壁に激突する。誠、坂を登ろうとするが、エンストする。

○【ゲームパート】車両発進3 自動車を発進させる

クリア条件…自動車を発進させる

誠の声「これ、マニュアルかよ！」

再び一人称視点になる。次の順序で視点を合わせ、アクションを起こすとクリア。「キー」↓「クラッチ」↓「アクセルペダル」↓「シフトレバー」。この時、誠の声でそれぞれ、「エンジンをかけなくちゃ」↓「クラッチはどれだ？」↓「アクセルは？」↓「シフトレバーは？」と口に出し、プレイヤーを誘導すること。時間内に達成できない場合、ゲームオーバー。

車が猛烈な勢いで坂を登っていき、ET2を跳ね飛ばし、パトカーも跳ね飛ばす。

## ○【ゲームパート】逃走 外務省に向かう

クリア条件…外務省に着く

誠の声「くそう、どこに向かえばいいんだ？」

誠、ナビの声に気がつく。

誠の声「ナビだ」

再び一人称視点になる。クリア条件は、ナビに従った方向に自動車を走らせること。もし途中で一度でも間違ってしまった場合、ゲームオーバーになる。また途中で信号のある交差点を3つほど出す。信号無視をすることもできるが、他車と激突した場合、ゲームオーバーとなる。

## ○外務省（夜）

誠が運転する自動車が外務省の前に着く。

誠、走りながら若島に電話する。

誠「若島さん、今どこにいるんですか？やばいことになりました」

若島の声「私は8階の会議室にいる。803会議室だ。一体何があった？」

誠「門脇さんが死にました」

若島の声「何だって？」

誠「例の警官が追ってきて、それで、あれは警官なんかじゃなかった、あれは、なんていうか別の生き物だった。背中から触手が生えてきて、それで俺たちを襲ってきたんです」

若島の声「わかった。話はあとだ。すぐ迎えに行く。正面玄関で待っていてくれ。」

## ■第2幕 第1場

### ○外務省 エントランス（夜）

正面玄関はひっそりとしている。夜間用の間接照明がついている。入り口の正面に職員用のゲートとそのすぐ隣に守衛室がある。守衛室から明かりが漏れている。ゲートの奥から、スーツの男が歩いてくる。

若島（52歳、男、情報局局长）「君が誠くん、かね？」

誠「はい」

若島「大変なことになったな」

誠「いったい何が・・・」

若島「君のお父さんは、沖縄で起きた婦女暴行事件の調査をするために、アメリカ軍病院に向かった。容疑者である兵士に面会するためだ。どうやらそこで一悶着があったようなんだ」

#### ○外務省 エレベーター内（夜）

若島「米軍兵士による暴行事件はこれまでも起きています。だから今回もそれまでと同じようにことを運べば問題ないはずだった。しかし、今回はどこか毛色が違ったのだ。はじめ、アメリカ側は面会を渋った。しかし我々には渋る理由が良くわからなかった。そもそも渋る理由がないからな。迅速に解決したいのであれば、面会して話し合いを進めるとするのが筋というものだ」

#### ○外務省 フロア8 廊下（夜）

若島「知っていると思うが、日本国内の米軍基地には治外法権は適用されない。それに加え、海外に出たところで、犯罪人引渡し条約の適用ができる。ところが、米軍側はその兵士をアメリカに返し、本国の施設で保護しようという計画が上がっていたようだ。われわれはその兵士が本国に戻る前に面会できるように交渉した。この場合は、早めに動くのが吉だった。そして面会は実現した」

#### ○外務省 フロア8 情報局オフィス（夜）

若島と誠、洋一のデスクに向かって歩く。デスクに到着して立ち止まる。

若島「Extraterrestrial life」

誠「何です？」

若島「地球外生命体」

誠「（うつむいて首を振りながら）冗談ですよね・・・」

若島「だが、君も見ただろう？自分の目を信じるべきだ」

誠「（黙る）」

若島、椅子に座る。

若島「婦女暴行事件を起こした兵士の肉体は、地球外生命体に乗っ取られていた」

誠「だから米軍は面会を渋ったのですね」

若島「そういうことだ。彼らもさすがに兵士の異変に気付いたのだろう。地球外生命体に関する調査を行っているのは何も日本だけではない。アメリカも同様だから



な。もう気付いているかもしれないが、君のお父さんは、そういった地球外生命体の調査を担っていた」

誠「(黙っている)」

若島「ただし、今回のようなケースはあまりなかったのは事実だ。よりによって、米国軍兵士の体に乗っ取り、おまけに事件まで起こした。沖縄の右翼団体が黙っているわけがなかった。もとより、外務大臣と沖縄県知事は対立関係にあったのだが、今回の件でさらに対立がひどくなった」

誠「親父は、どうなったんですか・・・？」

若島「今は事実関係を確認中だ・・・。彼とは連絡が取れなくなってしまった。ただ、何か良くないことが起きているのは確かだ」

誠「親父は沖縄にいるんですか？」

若島「・・・いや。東京にいるよ」

誠「沖縄に行ったのでは？」

若島「沖縄には行っただ。だが、親父さんは、すぐに帰ってきた。その後、東京のある施設に移動した。例の兵士と一緒にな」

誠「親父に会いに行きましょう」

若島「危険だ。危険だよ」

誠「親父が事件の中心にいるのなら、親父に会いに行かないことには何が起きているのかわからないじゃないですか」

若島「それはそうだが・・・」

若島「しばらく思案する。」

若島「リスクは高いぞ。行くか？」

誠、頷く。

若島、誠が手に持っているM1911を一瞥する。

若島「それは門脇の銃かね？」

誠「そうです。すみません、くすねてきました」

若島「コルト・ファイヤーアームズ社製M1911(エムナインティーンイレブン)。通称コルト・ガバメント。数十年前まで、上級警察官に支給されていたものだ。人を撃ったことは？」

誠、若島の顔を一瞥する。

若島「すまない。射撃の経験は？」

誠「(下を向いて) さっき・・・」

若島「それをこちらへ」

誠、若島にガバメントを渡す。

若島「なるほど」

誠「(黙ったまま)」

若島、銃の使い方を教える。そして、再度誠にM1911を渡す。

若島「弾もやろう。次は確実に仕留めろ」

若島、リュックと防弾チョッキを渡す。

若島「そのスマートフォンを使ってもいいが、別の連絡用の端末がそのリュックに入っている。少しここで待っていてくれ。わたしも準備をしてくる」

若島、オフィスを出る。しばらくすると、誠のスマートフォンが鳴る。

誠 「もしもし？」

夏海の声 「お父さんは私たちを殺そうとしている・・・」

誠 「え？」

夏海の声 「さっき、お父さんと私を誘拐した警官の話し声がした。お父さんが警察官に指示を出していた！よくやったって言っていた」

誠 「母さん！」

夏海の声 「お父さんは、この世界を危険にさらそうとしている。地球外生命体が世界に広がってしまう。あの人はそうやって異星人に与することで利益を得ていたの・・・。どこから来たのかわからないお金が振り込まれていることがあった・・・。そしてたかさんの女の人を囲っていた。わたしや家庭のことなんかほったらかしにしていたのに！」

誠 「(黙っている)」

夏海の声 「わたし、きつと殺されるんだわ・・・」

誠 「落ち着いて。どういう状況なの？」

夏海の声 「誠は今どこ？おうちにいるの？警察の人こなかった？」

誠 「来た。殺されそうになった」

夏海の声 「(微妙な間を置いて) お父さんの仕業よ。わたしたちをはめようとしている」

電話が切れてしまう。父親からメッセージが届いていることに気がつく。「事情があつて家に警察を呼んだ。お前や母さんに危険が及ぶかもしれない。警察が来たら警察の指示に従って避難してくれないか」

誠の声 「親父が仕組んだことだったのか？」

オフィスの扉が開く音がする。EINがオフィスに入ってくる。

誠、電話を切って、しゃがむ。

ET2 「そこにいるのはわかってる」(モニターの光が誠のいるところだけついているため  
ばれる)

ET2' ゆっくりとオフィスを歩く。

ET2 「お父さんから頼まれたんだ」

ET2' モニターが光ついているところに近づいていく。

ET2 「乱暴はしないから、こっちにおいで」

ET2' モニターが光っている箇所を覗き込む。誰もいない。

ET2 「(やや強い口調で)どこだ?」

## ○【ゲームパート】ET2戦 外務省オフィス編

クリア条件…各戦闘パターンにおいて、一定のダメージを与えること。

### ○ET2戦闘パターン1

敵状態…通常の徒歩で索敵。

攻略方法…物陰に隠れて、相手の裏を取り、射撃する。

クリア条件…一定のダメージを与えること。

### ○ET2戦闘パターン2 8本足歩行

敵状態…8本足歩行で索敵。パターン1よりキビキビした動作になる。足に目玉が  
生えていて、それでも索敵を行うようにする。

攻略方法…相手の裏を取り、足の目玉に見つからないようにして、射撃。

クリア条件…一定のダメージを与えること。

### ○ET2戦闘パターン3 8本足銃撃1

敵状態…ET2'本体は地上。2本の足でひとつの組みを作る。ひとつの足を目、もう  
一方の足は銃を持っている。主人公が隠れているところに、足が伸びていく。

攻略方法…目を射撃する(銃を持っている足ではない)。もしくは、本体を射撃す  
る。

クリア条件…一定のダメージを与える。

### ○ET2戦闘パターン4 8本足銃撃2

敵状態…ET2'足が二つひと組みであることは変わらないが、空中からも接近して  
くるようにする。急に頭上に現れたりしてプレイヤーを驚かせたい。

攻略方法…基本は隠れるように移動し、角と空中に注意を向けるようにする。机の

下に潜り込めるなどのアクションを追加すると面白いかな？  
クリア条件…一定のダメージを与える。

## ○【ゲームパート】ET2戦 外務省廊下編

敵状態…戦闘パターン2  
攻略方法…基本的にこのゲームパートでは、戦闘ではなく、逃げるのが吉。  
クリア条件…階段にたどり着くこと

誠、オフィスから出る。エレベーターに向かい、ボタンを押す。しかし、ET2がやってきて、手榴弾を投げる。誠角に逃げ込み、爆発から逃れるが、エレベーターのドアが壊れ、乗ることができなくなる（エレベーターの手前に階段がある）。炎の奥からET2が銃を撃ちながら歩いてくる。誠、角に隠れ、ET2がこちらに近づいてくるところで、ゲーム開始。

ET2「君のお父さんはひどい人間だよ。実の息子を殺せだなんて……。悪い男だ」

ET2「お母さんだけは連れて行つたのに、君はおきざりか……。出来の悪い子だったのかな？」

ET2、戦闘パターン2の形態で迫ってくる。

誠が階段にたどり着くとイベント発生。

## ○外務省 階段（夜）

階段にたどり着くと、下に降りることができる。誠の視点で、1階までかけ降りていく。プレイヤーに操作はさせない。降りていく途中で、爆発音がし、建物の電気が落ち、非常灯のみが光る状態になる。誠は息切れの状態で、1階までかけていく。

## ○【ゲームパート】ET2戦 外務省エントランス編

敵状態…戦闘パターン2。視界は暗闇のため、狭くなっている。  
攻略方法…稲光で光った時に敵の姿が見えるので、それを記憶し、射撃する。  
クリア条件…一定のダメージを与える。

全面ガラス張りのロビー。主人公が出口に向かって走っていくと、出口からET2が現れる。

誠の声「くそ・・・」

と言って、ロビーに置かれているソファの後ろに隠れる。雷が轟く。

ET2「出てこい！」

#### ○【ゲームパート】ET2戦 外務省中庭編

敵状態…透明になる。戦闘パターン1と戦闘パターン2。

攻略方法…影に隠れて、雨粒で人型のシルエットができているところを探す。

クリア条件…一定のダメージを与える。

誠の声「くそう、雷が止んでしまった」

誠、ET2の隙を見計らって、外に出る。外は雨が降っている。ET2、周囲の風景と擬態化する。しかし、雨がしたたっているのと、雨の飛沫で若干視認できるようにする。また、目は擬態化しない。弱点は本体と目。

一定ダメージを与えると、雨が止む。

誠「くそう、どうする？」

と言って、ふたたび外務省のロビー走っていく。

#### ○【ゲームパート】外務省 外務省エントランス編2

敵状態…透明。戦闘パターン1と戦闘パターン2。

攻略方法…敵の足音で接近を判断する。また、スプリンクラーの飛沫で敵の姿を確認する。

クリア条件…一定のダメージを与える。

誠、出入りロケット横の警備室に入り、消化ボタンを押す。非常ベルが鳴り響き、スプリンクラーから水が出てくる。警備室から出ると、玄関の真ん中にET2が立っている。ET2 本体が誠に向かって猛然と走ってくるところでゲーム開始（何発か弾を当てないと、走りが止まない。止められないと警棒で殴られる）。一定ダメージを与えると、ET2が手榴弾を投げまくり、ロビーを火の海にする。背中から足が出てきて、すべての足に拳銃を持った状態になる（炎で実質一本道にする）。

誠の声「ダメだ・・・。逃げるぞ」

誠、ふたたび階段のほうへかけていく。それを見つけたET2が、誠に向かって手榴弾を投げる。爆発が起こる。

○外務省 物置部屋 (夜)

爆発が起きる間一髪で、若島が誠を物置部屋に匿う。

若島「こつちだ。業務用のエレベーターがある」

棚の奥に行くと、大きめのエレベーターがある。

○外務省 業務用エレベーター (夜)

若島が、パネルをこじ開け、何か細工をする。エレベーターが動き出す。誠、膝に手を置いて、息を整えようとしている。

若島「官邸に緊急連絡を入れておいた。もうじき非常事態宣言が発令されるだろう」

誠、エレベーターの角に座り込む。

若島「誠が疲れていることに気が付いて」 大丈夫かね」

誠、顔を上げて、

誠「(恨んでいるような感じで) どこ行ってたんですか・・・」

■ 第2幕 第2場

○地下道 (夜)

若島「東京の地下網は世界一複雑だと言われている。地下網は、まるで何かの生き物のようにその脈を伸ばしてきた。いま我々がいるのは、要人が緊急時に使用する地下通路だ。公には公表されていないがね。この通路は、国会議事堂、政府官邸などにも通じている。そして例の施設にも」

誠「親父はそこにいるんですか？」

若島「おそらく、な」

誠「あの」

若島「どうした？」

誠「いえ、何でもないです。ただ・・・」

若島「どうした？」

誠「この騒ぎの原因は親父にあるんじゃないかと思います」

若島「(微妙に間をおいて) なぜそう思う？」

誠 「いや（少し間を置いて）、なんとなく、です」

若島 「渡辺君がそんなことするはずあるまい」

誠 「さっきの警官、親父が俺を殺そうとしているって」

若島 「（微妙な間）まさか。実の息子に手を掛けるような父親がどこいる」

誠 「そうだいいんですが」

若島 「とにかく、施設へ向かう。お父さんや警護の者もいるはずだ。例の警官も追っては来れまい」

誠の声 「どうにかして母さんを助けださなくちゃ・・・。今はこの人についていこう。そうすれば親父がいる場所にたどり着けるはず」

誠 「（少し間をおいて）いまごろ、地上はどうなっているんですかね」

若島 「あれだけの被害だ。警察だけでなく軍も出動しているに違いないな」

誠 「若島さんは、怖くないんですか」

若島 「怖いさ。（少し間をおいて）こんな状況になってしまうとは」

誠 「でも、怖がっているように見えませんよ」

若島 「さあ、歳のせいかな。それに、怖いことなら他にもたくさんあるよ」

誠 「あの化け物より怖いものがあるんですか？」

若島 「この仕事についていけば、多少はね」

誠 「人、ですか」

若島 「そうだな。裏切り、恐喝、謀反。そんなものは序の口さ。時に殺人にまで手を伸ばす」

誠 「親父もその一人になるかもしれないですね」

若島 「（少し間をおいて）この世界は複雑だ。憎悪や憤怒の感情が人々を結託させることがある。そしてそれらの感情を受け止める社会構造がある。構造とそれを動かすエネルギーさえ存在すれば、あとは自動で歯車が動き出すんだ。いったん回り出した歯車は誰にも止められん。だが、そもそものはじまりである人々の負の感情を抱かせるものは何だったか？それは社会構造であったり、人々の固定観念なんだ・・・。  
この世界はまさしく因果応報だよ」

誠 「カルマってやつですか」

若島 「そうだな。まあ、とにかく、まだ父親のことを信じてみてはどうだい？」

誠 「（黙る）」

若島 「何か事情があるのかもしれない」

誠 「大変じゃないですか？」

若島 「え？」

誠 「そんなに大変な思いをしてでも、今の仕事を続けているのはなぜですか？」

若島 「理由はないね。それが仕事だからだ。努力しないでも今の仕事ができるからだ。できないことはできないし、できることはできる。ただそれだけだ。今の職務についてのは単なる偶然。この仕事に就きたいという強い意志は持っていなかった」

誠 「そうですか」

若島 「そうだよ」

誠 「僕は将来のこと、何にも考えていないんです」

若島 「今は、高校生かい？」

誠 「ええ」

若島 「焦ることはないさ。時間はたっぷりある」

誠 「僕はそういう言葉は信じないんです」

若島 「（少し笑って） そうか」

誠 「このままじゃいけないって、そんなことばかり考えているんです」

若島 「君はまだこれからじゃないか。大学に行ってもいいだろうし、就職してもいいかもしれない。今は人手不足だし、求人はあるだろう。大学に行って友達と何かしたり、研究したり、働き出せば、良いことも悪いことも経験するさ」

誠 「（下を向いて） そうですね」

若島 「どうした？」

誠 「不安なんです、すごく。世の中が抽象的で何が起きているかわからないんです。通学の時に毎日スーツを着た人たちを見かけるけど、何をやっている人なんだろうって。たくさん的高いビルが建っているけど中の人たちは何をやっているんだろうって……。サラリーマンって何だろうって。まるでキュビズムの絵の中に迷い込んでしまったみたいです」

若島 「なるほどな。君の目には世界はそうように見えているのだね」

誠 「まあ、そうですね。頭が真っ白になって、何から手をつけたらいいかわからない」

若島 「君の好きなものは？あるいは、得意なこととか」

誠 「うーん（しばらく悩む）。ゲームですかね」

若島 「それだけ？普段やっていることは？」

誠 「ネットサーフィンするか、たまに本読んだり、映画見たり……。あとは形だけは受験生です」

若島 「得意だと思うことは？」

誠 「わかりません。（自嘲気味に） まあ、悩むのが得意ですかね」

若島 「悩む、か。考える、という言い方もできないかな」

誠 「それでもいいと思います」

若島 「君は考えることが好きなんだよ」

誠 「かもしれません」

若島 「カルマって言葉を知っているくらいだし、君は物知りだよ」

誠 「誰でも知ってますよ」

若島 「まあまあ。とにかく、周囲に気を取られないで、今の君にできることに集中すべきだろう」



誠 「今の僕にできること、ですか」

若島 「そうだ。今の君が頑張らなくてもできること。まずはそれから始めるんだよ。たとえば、本を読むことは頑張らなくてもできるだろう？」

誠 「そうですね。趣味みたいなものだから」

若島 「それでいいのさ。自分が楽しいと思えるところから、興味の範囲を広げていけばいい。そうやっていくと、学ぶことが楽しくなるよ。まあ、学校の授業とは直接関係ないかもしれないが。ここだ。ついたようだな」

### ○地下施設 出入口（夜）

誠、若島、地下施設の出入口に入る。

若島 「どうした？暗いな」

誠 「非常電源だけ点いているみたいですね」

若島 「いやな感じだな。とにかく中に入ろう」

### ○地下施設 廊下

廊下も暗く、ダクトが壊れていたり、青い液体が壁に飛び散っていたりする。若島、拳銃を片手に歩いていく。

若島 「気をつけろ」

誠、無言で若島の後ろについていく。

### ○地下施設 面会室

若島が面会室に入っていく。面会室だけは明るい。そのあとに誠が続く。面会室の先の扉を開くと、死体が転がっている。

若島 「これは？」

誠 「（驚く）」

若島 「（少し間をあけて）例の婦女暴行容疑の兵士だ。なぜ死んでいる？」

誠 「乗っ取られていたのでは？」

若島 「ああ、そうだ。だが、この様子だと、もうそうではないらしい」

誠 「これからどうします？」

誠のスマートフォンのバイブが鳴っている。

誠「親父からです」

## ○都内地下施設 面会室（夜）

（このパートは、前パートより少し前の出来事である）

面会室は、真っ白な蛍光灯の光が煌々と照っている。そのなかに、椅子があり、アメリカ兵士が後ろに手を回されて座っている。彼の正面に洋一（誠の父）が立っている。面会室の背後には、マジックミラーがある。マジックミラーの背後には、アメリカ軍の要人、アメリカの日本大使、警備の者、などがある。

洋一「なぜアメリカ兵の体の乗っ取ったのだね？」

洋一、腕を組んで立っている。

兵士A、顔だけを上に上げて、

兵士A「襲ってきたのは向こうだ。だから返り討ちにした」

洋一「仮にそうだと、女性にまで暴力を振るう必要はないだろう」

兵士A「本能さ」

洋一「何だって？」

兵士A「暴力は本能なのだよ、自身の生存領域を維持・拡大するための。君たちもそうだろう？」

洋一「お前たちと一緒にしてほしくないな。お前たちには文明というものが無いのかね？あまりに原始的で野蛮すぎる。彼女にしたのは暴力だけではないか？彼女に何をした？」

兵士A「言わせるなよ。あんたにもわかるだろう」

洋一「彼女はどうか？」

兵士A「知らない。それは誰にもわからない」

洋一「力づくでも吐かせるぞ？」

兵士A「誰にもわからないと言っただろう？だいいち、この兵士の体が傷ついてもいいのかね？」

洋一、後ろを振り向く。防弾ガラス越しのアメリカ軍の責任者、首を降る。洋一が耳元に手を当てて、イヤホンに耳をすませる。

責任者「サトシ、それは許されない」

洋一「話を変えようか。あんたはひとりか？」

兵士A「そう思うかい？」

兵士A、洋一の胸にかかっているカードを一瞥する。

兵士A「ワタナベヨウイチ」

洋一、胸にかかっているセキュリティカードを胸ポケットに入れる。

洋一「あの日の夜、あんたはもう一人の兵士と一緒にだっただろう？」

兵士A「ああ、Bのことか」

洋一「Bはあんたらに襲われたときの記憶がなかった。気がついたらベッドにいたと」

兵士A「酔っていたんだろう？」

洋一「お前単独の犯行ではないだろう？もう一人いたんだな？」

兵士A「ヨウイチ、どうしてもう一人いると思うんだい？」

洋一「砂浜には二人の人間が倒れた跡が残っていた。倒れた後、しばらく二人で街の方へ歩いて行った」

兵士A「ご名答」

洋一「もう一人はどこに行った？」

兵士A「観光でもしてるんだろう」

洋一、イヤホンに手を当てる。

洋一「わかった。立て」

と言って、兵士Aを立たせようとして、手を掴む。その時、ETIが洋一の脳内をマッピングする。その作用で、危機が迫っていることを何となく感覚する。

洋一、はっとして兵士Aから体を話す。

兵士A「ミスターワタナベヨウイチ」

洋一、黙って兵士Aを見る。

兵士A「俺に会いに来たことが、まず最初の間違いだったな」

兵士A、洋一の耳元に近づいて囁く。

兵士A「奥さんは預かった」

兵士Aがジャンプして、天井の通気口に張り付く。兵士Aの体からずると蛸らしきものが出てくる。中身のなくなったような血だらけの兵士の体が床に落ちる。

洋一、たじろぐ。マジックミラーの向こう側の人間も静まり返っている。

洋一、慌てて、緊急ボタンを押す。  
館内にベルが鳴り響く。

洋一「やつを外に出すな！」

施設内の電源が落ちる。

洋一「警護班は電源の復旧と、大使を護衛しろ。出口も固めるんだ。俺はやつを探す」

## ○【ゲームパート】ET1戦 地下施設編

### ○パターン1

施設内を探索すると、通気口が壊れており、血がついている箇所が見つかる。その血を追っていくと、ET1が壁に張り付いているので、それを射撃する。

### ○パターン2

ET1がダクトに入ってしまうパターン。ET1が移動している箇所は揺れるので、そこを射撃する。また、通風孔から足が飛び出してきて、攻撃もしてくる。

### ○パターン3

ET1、洋一に擬態する（銃まで擬態する。弾はくちばし）。

ダクトが崩れて、洋一が怯んでいる隙に、ET1が出口から出ていく。このとき、ET1は擬態をしており、出入り口の兵士は気がつかない。洋一が起き上がって、出口に向かう。兵士が驚いた様子で洋一を見る。

洋一「おい、やつは来なかったか？」

兵士「洋一さん、さっきここから出て行きませんでした？」

洋一「そいつだ。そいつがやつだ」

## ○地下通路（夜）

洋一、出口から飛び出て、ET1を追いかける。地下通路は暗く、時折、電灯が光っている程度。洋一と兵士でET1を追いかけるが、ET1の射撃が兵士に命中し、洋一ひとりがET1を追いかける。ET1が様々な人間に擬態を繰り返しながら、走っていく（アメリカ軍兵士、洋一、見ず知らずの一般人、暴力を振るった女性、透

明・・・)。

ET1がジャンプして、はしごを跳ね上がっていく。洋一が銃撃するが、ET1の動きは止まらない。洋一、ET1のあとを追ひ、はしごを登っていく。

### ○東京タワー近くの広場(夜)

洋一がはしごを登って、外に出る。外は、幅が広い道で、ライトアップがされている。背景には、東京タワーがそびえ立っている。雑踏、サラリーマンやカップルたちが右に左に歩いている。

洋一、あたりを見渡す。ET1らしき人物の姿は見当たらない。

洋一、ふと視線を落とすと、地面に青い液体(血)が点々と続いていることに気がつく。それは東京タワーの方向に向かって伸びている。洋一、人混みを縫って、その血の跡を追っていく。

### ○東京タワー 建設作業員用入口

東京タワーの検察作業員用の入口が壊されている。その下に点々と血の跡が続いている。入口からはすぐに階段が伸びている。洋一が上を見上げると、ET1が階段を登っていくのが見える。洋一、近くにエレベーターがあるのを見つけ、それに乗り込む。

### ○東京タワー 先端付近の鉄塔

兵士の姿をしたET1が、階段を登ってくる。

洋一、エレベーターを使って、先回りして、待ち伏せしていた。

ET1が、鉄塔の柱の後ろに隠れる。

洋一「いつまで逃げるつもりだ」

ET1、柱の影で洋一の言葉をじっと聞いている。

洋一「私の妻はどこだ？」

ET1「(間を置いて) お前たちは自分たちが何者かわかっているのか？」

洋一「質問に答えろ」

ET1「お前は俺の暴力を否定したが、自分たちの暴力は否定しないのか？」

洋一「(魔を置いて) 自衛のためだ。国を守るためなら、武力を行使することも辞さない」

ET1「だとするのなら、こちらにも自衛の権利はあるだろう？お前たちは3年前、俺たちの家族を奪ったことを覚えているな？」

洋一「安心しろ。彼は私たちの家族になった。そして丁重に埋葬した」

ET1「家族だと？お前は家族の足を切り落としたりするのかい？」

洋一「医療検査のためだ。われわれに害がないか調査する必要があった。第一、足を切ってもまた生えてくるじゃないか」

ET1「お前たちには本当に呆れたよ。俺たちも自衛権を行使しようか」

洋一「残念だがそれは不可能だ。お前たちは人間ではない。人間ではないものにどうして法が適用できる？生命倫理の哲学者でも呼ぼうか？」

ET1「そんなもの鼻から期待しちゃいない。どうやら俺たちは囚人だな。争うという選択を、互いに取ろうとしている。愚かだ」

洋一「お前たちのような生物の説教などごめんだよ」

ET1「なあ、あんた。知性とはなんだと思う？」

洋一「何を言っているんだ」

ET1「俺たちはお前たちの知性をマッピングしたんだ。脳の機能や構造も、すべて」

洋一「だからなんだというんだ」

ET1「その結果がこれだ」

洋一「・・・」

ET1「つまり、今のお前が見ているものは、いわばお前たち自身なのだよ。私はお前たち分身だ」

ET1が洋一の姿に擬態し、柱から姿を見せる。

ET1「お前たちの知性を利用して、俺たちはあんたの奥さんを奪った。かつてお前たちが俺たちの仲間を奪ったときと同じように」

洋一「どうすればいい？」

ET1「これでよくわかっただろう？自分たちの野蛮さを」

洋一「野蛮だと？」

ET1「そうだ。俺の行為が野蛮であるなら、お前も野蛮なのだ。なぜなら俺はお前の分身だからな」

洋一「・・・お前たちの目的はなんだ？」

ET1「お前たちが二度と俺たちに関わらないようにすること・・・これだ」

洋一「もう手出しするかと？」

ET1「そうだ。お前たちと関係を結んだところでわれわれに良いことなどひとつもない。あんたたちは研究対象にしたがるようだが」

洋一「確かに、われわれがお前たちのおかげで利益を得たことは事実だ。しかし・・・」

ET1「何を悩んでいる？お前の妻が痛めつけられるかもしれないんだぞ？お前は自分の妻を信じてないのか」

洋一「（一瞬躊躇して）信じるさ、ああ、信じるとも」

ET1「そうか。お前の奥さんは展望台にいるよ」

洋一「・・・」

ET1「息子は信じるか」

洋一「むろん、信じるさ」

ET1「（少しの間沈黙して）すまんが、君の息子は乗っ取ったよ。君を殺しにくるはずだ」

洋一「話が違うじゃないか！われわれよりひどいことを・・・」

洋一、洋一の姿に擬態したET1の額を撃ち抜く。額からゆっくりと血が垂れる。

そして、大の字になって、東京タワーから落ちていく。洋一、頭上を見上げる。上には展望台がある。洋一、階段を見つけて、駆け上がっていく。

## ○東京タワー 展望台

展望台の非常扉が開く。そこから洋一が出てくる。

展望台の窓付近に、女性の人影があり、手すりにもたれて、外を見ている。

女性「あなた、来たの？」

洋一「夏海？夏海なのか？」

女性の耳のイヤリングが揺れる（冒頭でつけていたイヤリング）。

女性「きれいな。こんなに美しい景色を独り占めできるなんて」

女性が振り返る。夏海である。

夏海「久しぶりね、二人だけでこういうところに来るの」

洋一「夏海、すまない。辛い思いをさせてしまった。こんなに、大変なことになるとは思っていなかった。俺の認識が甘かった。家族まで巻き込まれることになるとは思わなかった」

夏海「仕方ない。きっとこうなる運命だったのよ。それがわたしたちの選んだ道」

洋一「俺は、いったい何を求めていたんだろう？なんのためにここまで働いてきたんだろう？」

夏海、少し移動する。

夏海「ときどき、田舎に帰りたくなった。私が海の近くで育ったこと、知ってるでしょ？」

洋一「ああ、昔は良く一緒に海に行ったね」

夏海「近くに海があると、安心するの。でもここには、私の知っている海はない。故郷の海じゃないとダメなの」

洋一「ああ」

夏海「でも、この景色は好きなの。何か懐かしい感じがする」

洋一「プロポーズした時も・・・」

夏海「そう。夜景を見ながら食事をしたね」

洋一「懐かしいな」

夏海「だからここで終わりにしましょう」

洋一「え？」

夏海「私たちはもう終わり」

洋一「俺は、もう、改心したよ。これからは、家庭を大切にしたい」

夏海「ごめんなさい。もう遅いの」

洋一「黙っている」

夏海「あなたには死んでもらう」

と言って、夏海が振り返る。夏海の顔は、穏やかな表情から、鬼のような形相に変わっている。夏海の背中から蛸の足が生えてくる。

洋一、柱の影に隠れる。

## ○【ゲームパート】夏海戦 東京タワー展望台編

クリア条件…一定のダメージを与える。

夏海の体には、光の玉が流れている。

夏海「私を、解放して」

洋一「何を言ってるんだ。必ず助けてやるから」

夏海「もう私は苦しみたくないの。きつと私はまた正気を失ってしまう。あなたも誠も不幸にしてしまう。ごめんなさい。私を許して」

夏海がまた、正気を失って、洋一の首を絞める。

洋一「夏海・・・」

と言いながら、夏海の首を絞めて、殺害する。

洋一、力が抜けて、夏海のそばに座り込む。しばらくじっとした後、誠に電話をかける。

## ○地下施設 面会室（夜）

誠のスマートフォンのバイブが鳴っているところからの続き。



誠、スマートフォンを見る。

誠 「親父からです」

若島 「出てみろ」

誠 「親父？俺だけど」

洋一の声 「（息切れしている）誠か？俺だ。大変なことになった。俺は今、東京タワーの展望台にいる。そこに・・・、母さんもいる」

誠 「母さん？母さんは無事なの？」

洋一の声 「（少し間を開ける）話は、こっちに來てからにしよう・・・」

誠 「わかった。すぐにそっちに行く」

誠、電話を切る。

誠の声 「このまま、何も知らないふりをして、親父に近づけば」

若島 「なんだって？」

誠 「え？えっと、親父は今、東京タワーの展望台にいる、と」

若島 「東京タワー？」

誠 「母もそこにいるみたいです」

若島 「わかった」

若島、少し思案する。

若島 「それなら、お母さんも安心だな」

誠の声 「いや、母さんに危険が迫っている」

誠 「ええ。とにかく、早く東京タワーに向かいましょう」

若島 「そうだな。夏海さんを助ける手立てはそれしかない。地下通路から東京タワーのすぐ近くまでいけるはずだ」

## ○地下道（夜）

若島 「とにかく、二人とも無事でよかった」

誠 「ここから東京タワーまではどれくらいですか？」

若島 「そう遠くない。15分くらい歩けば、出口があるはずだ。本当は利用すべきではないのだが」

誠 「あの、聞きたいことがあるんですが」

若島 「なんだ」

誠 「外務省には地球外生命体に関する部署があるんですね」

若島 「ああ、そうだ」

誠 「いったい、どんな活動をしていたんですか。俺、親父がどんな仕事をしていたか全然  
しらないんです」

若島「地球外生命体に関する調査は、公にはされていないが、我々の通常業務に組みこまれている。このことを知っているものはごく限られた人間のみだ。」

\*イメージ映像 開始\*

若島の声「我々が、一番はじめに地球外生命体の存在を予感した事件は、20年前に遡る。事の発端は沖縄の東シナ海で起きた。漁師が見たことのない蛸を網に引っ掛けたんだ。漁師はまず漁協に連絡し、漁協は沖縄極地研究所に連絡を入れた。例の蛸は、研究所職員が、クーラーボックスの中に嚴重に入れて搬送した。そしてある研究員の手に渡った。この研究員のことを仮にAと呼ぼう。Aが例の蛸をクーラーボックスから取り上げたときのことだ。Aはこんなことを言ったそうだ。

『その蛸が俺の体に触れた瞬間、見えたんだ。イメージが流れ込んできた。この蛸が海底に潜んでいたときのこと、貝を見つけて鋭い嘴で噛み砕くその音、あみに囚われたときの感触。そして、不思議なことに、この蛸を捕まえた漁師の過去も見えたんだ。この漁師は3年前に母親を亡くした。家は漁港近くの小高い丘の斜面のコンクリート造りの家に住んでいること。モダンな建物なので気に入っていること。そんなことがわかったんだ。本当さ、嘘だと思うなら実際に調べてみなよ』

これは嘘じゃなかった。Aが病院に入ってしまうより前、Aの言葉が正しかったことが証明された。Aの同僚が試しに調べてみたんだそうだ。その家の漁師を訪ね、Aを知っているかと質問した。漁師はそんな男は知らないねと言ったそうだ。ところであなたはあの蛸を捕まえたあとに何か体に異変はなかったかと聞いた。いや、と漁師は答えた。ただ、海の中にいる夢をよくみるようになったと言ったそうだ。これも例の蛸の影響なのだろうか？私にはわからないがね。そして同僚が研究所に戻ってみると、研究所が大騒ぎになっていたそうだ。例の蛸がAの頭に張り付いて離れなかったんだ。そしてそのAが他の研究員を襲ったのだという。それでAをなんとか止めようとスタッフが彼を取り囲んだ。Aはこう言ったそうだ。

『俺に危害を加えるなら、こちらにもその用意はできている。どうなっても知らない。俺たちはお前たちとは違う。お前たちは俺たちを知らないが、俺たちはお前たちを知っている』

3人の男たちがAを取り押さえた。みんな必死だったせいかな、例の蛸が見当たらないことに気がついたのは、Aが意識を取り戻してからだった。いや、より厳密に言うくと、Aは元どおりに意識を取り戻したわけではなかった。Aは気が狂ってしまったのだ。何か目に見えないものに対して怯えているようだった。幻覚や幻聴が後遺症として残ってしまったのだ。調査の結果、我々は例の蛸に襲われたのが原因ではないかと我々は推察した。例の蛸が彼に張

り付いた時、Aの脳をこれまでにないような使い方をしたに違いない。Aの脳はそれに耐えられなかったんだろう。

そう、それで、例の蛸なんだが、完全にいなくなってしまった。どこから消えたのか定かではない。とにかくいなくなった。われわれは研究所からこの事件の報告を受けた時、彼らの話を信じないふりをした。Bは物事を真剣に考えるあまり、ついに気が狂ってしまったのだと。当初、研究所の人間は蛸が人間を乗っ取ったと言って聞かなかったが、最後はきつと何かの勘違いだったんだと思ひ込むようになった。だが、我々はそのような知性体がいるのではないかという情報をすでに持っていた。君のお父さんは、地球外生命体に関する情報を中心に、調査・収集を行っていた。そうなんだ、地球外生命体というのはすでにこの世界に存在していた。少なくとも、その痕跡だけはあった。今回の事件のように、各地で発生している未解決事件や自殺、海での溺死など、いわゆる怪死と呼ばれるものにはたいてい地球外生命体が絡んでいるように思われた。

そして、我々が地球外生命体を捕獲できたのは、その17年後だった。そしてそれは、そう、さきほど我々がいた施設に移送され、研究対象となった。我々はそれをエスと名付けた。我々はエスを研究した。彼らは言語を解釈することができた。メカニズムはわからないが、彼らは触れたものから情報を吸い上げることができた。我々はこう推測した。彼らはわたしたちの脳の構造を模写（コピー）することができると。複雑なニューロンのネットワークと、そこから生まれるイメージやシンボル、そして自意識というものまで理解できるのだと。これは彼らに擬態の能力があることと関係しているのかもしれない。彼らはコピーの天才だった。だが、例の蛸が人間を乗取ることができるところまでは半信半疑のところがあった。すくなくともエスはそのような行動を取らなかった。しかし、この沖縄で起きた事件で、人間を乗取ることができるらしいということが証明されてしまった。

\*イメージ映像 おわり\*

誠 「じゃあ、俺を追ってきた警官も・・・？」

若島 「そうだ。やつらに操られているのかもしれない」

誠 「でも、どうして？どうしてやつらは僕を執拗に追いかけてくるんですか？」

若島 「わからない。ただ（一瞬、黙って）、やつらには知性がある。だから、何らかの目的があってもおかしくはない。しかし、我々のように声やしぐさで何かを表出しているわけではないから、我々がそれを理解するのは困難なのだ」

誠 「僕らは、その未知の知性を持った相手と戦っているというわけですか」

若島 「そういうことになるな。もはやここまで来ると、嫌な予感しかない。世界大戦にでもなるのかもしれない」

誠 「そうならないことを願います」

若島と誠、しばらく黙って歩いて、そして立ち止まる。暗い通路の奥に警察官が立っているのが見える。ET2である。

廊下が崩れて、誠がどこかに落下する。若島は間一髪で落ちなくて済む。

## ○列車墓場（夜）

列車墓場は、砂浜のような砂が波のように広がっている。古いアーチ状の石柱のようなものが建っている。砂の中に半ば埋もれるようにして、打ち捨てられた電車が両が無造作に置かれている。誠は砂山のひとつに落下し、気絶している。

若島「大丈夫か！」

誠、まだ目を覚まさない。

若島「おい、大丈夫か！」

誠、目を覚ます。

誠「（息苦しそうな）ああ」

と声を漏らす。そして、しばらくじっとして、息を整える。

若島「大丈夫か！」

誠「（かすれたような声で）大丈夫です」

と言って、ゆっくりと立ち上がり、若島に向けて手を上げる。

誠、視線を空間の奥に向けると、ET2が歩いてくるのが見える。

若島「今からそっちに向かう。それまで持ちこたえろ」

と言って、サブマシンガンを誠に向かって投げる。

若島「君のリュックにはショットガンと手榴弾が入っている。それも使え」

誠「くそう、しつこいぞ」

と言って、サブマシンガンを装備する。

## ○【ゲームパート】ET2戦 列車墓場編

各戦闘パターンにおいて、次の攻略方法が利用可能。

### ・砂の利用

- ・サブマシンガンで砂を打つと、砂煙を上げることができる。
- ・手榴弾を砂地を爆発させると、砂煙を上げることができる。
- ・効果…煙幕効果で敵の視界を遮ることができる
- ・効果…ET2の足の目の中に砂を入れることで、一定時間、行動を制御することができる

### ・柱の利用

- ・手榴弾で柱を爆発させると、柱が崩れ、上から石を降らせることができる。

効果…大ダメージ

## ○パターン1 8本足通常歩行

クリア条件…一定ダメージを与えること

攻略方法…相手の裏に回って、射撃すること

攻撃パターン…砂かけ攻撃、通常銃撃、なぎ倒し、柱を使って突進攻撃など

索敵パターン…本体の視界のみ

## ○パターン2 2本足ペア索敵&銃撃

クリア条件…一定のダメージを与えること

攻略方法…目を銃撃する。目に砂をかけて、怯ませ状態にさせて銃撃する。

攻撃パターン…蛸の足での銃撃、突つき

索敵パターン…足についている目で索敵を行う

列車墓場が急に静まり返る。

誠「野郎、どこに行きやがった」

遠くから、伸びている足だけが見える。

## ○パターン3 本体歩行&全方位監視

クリア条件…一定のダメージを与えること

攻略方法…全方位に視界があるため、砂煙を巻き起こして、視界を外すか、砂煙を利用して、目潰しを起こすことで、相手の攻撃を防ぐことができる。

攻撃パターン…銃撃

索敵パターン…体の周りに目を纏わせるパターン、すべての足を伸ばして索敵するパターン

#### ○パターン4 本体のみ行動

クリア条件…一定のダメージを与えること

攻略方法…足音を良く聞いて、どちらににいるか大まかに把握し、相手の裏に回ること

攻撃パターン…銃撃、警棒、ヤクザキック  
索敵パターン…本体の視界のみ

#### ○パターン5 本体のみ行動+透明化

クリア条件…一定のダメージを与えること

攻略方法…足音をよく聞く、かつ砂地の足跡か血液の跡をよく見て、敵を発見すること。

攻撃パターン…銃撃、警棒、ヤクザキック  
索敵パターン…本体の視点のみ

一定ダメージを与えると、ムービーに移行。

誠、柱の影に隠れている。そこに、後ろから、ET2が近づいてくる。誠、はっとして後ろを向くと、ET2が銃を構えている。遠くから銃声がして、ET2が怯む。ET2が、銃撃のあった方を向いて反撃するが、倒れる。

若島「逃げろ！」

誠が走る。

若島、ロケットランチャーを構えて、打つ。

ロケットが着弾し、爆風と砂煙。そして柱が崩れる。

砂煙が収まって、列車墓場が静かになる。

若島ト誠、着弾した場所に向かって歩いていく。

ET2が仰向けてになって倒れている。下半身が石柱に埋もれている。

ET2が服を脱いで、上半身が露わになる。そして、体が透明になったり、映像が流れる。そこには、洋一が夏海的首を絞めている映像が流れる。誠、息を飲む。ET2、そのまま気を失う。体に流れていた映像は消える。

誠、走り出す。

若島「おい！」

誠、息を荒らげて、振り向く。

若島「落ち着け。私の先導が必要だろう」

誠、下を向いて、

誠「そうですね」

■ 第3幕

○地下通路 東京タワー付近に出る梯子（夜）

若島と誠、梯子を上っていく。

○東京タワー近くの広場（夜）

若島と誠、東京タワーを見上げる。

若島「あそこだな」

誠「ええ」

○東京タワー展望台

誠、入り口から入ってくる。そのあとに若島が入ってこようとするが、誠が扉を絞めて、開けられないようにしてしまう。洋一と倒れている母親が見える。

若島「おい、どうしたんだ、ここを開けてくれ」

誠「人殺し！」

と言って、早歩きで歩いていき、洋一に向かって銃を撃つ。

若島「やめろ！」

と言って、ドアを開けようとするが、開かない。

洋一、柱の影に隠れる。

洋一「誠、お前も母さんと同じなんだな？」

誠「出てこい！殺してやる！」

○【ゲームパート】洋一戦 東京タワー展望台編

クリア条件…一定のダメージを与えること

攻略方法…基本的に洋一は物陰に隠れてリロード、物陰から体を出し射撃、という行動を繰り返すので、そのパターンを見抜き、射撃する。また、柱から柱へと移動するので、その時も射撃できる。裏を取ることはできないようにする。

○洋一戦後 東京タワー展望台

洋一、夏海の近くに倒れる。

別の入り口から若島が中に入ってくる。

若島「なんてことだ・・・！」

と言って、洋一と夏海の近くに走っていく。若島は、洋一と夏海の間を行ったり来たりしている。

誠が洋一の近くに寄っていく。

誠「どうして母さんをこんな目にしたんだ！」

洋一、重症のため話すことができない。

若島「なんてことだ」

と繰り返し言っ、夏海のそばに倒れる。そして、顔に手を寄せる。

夏海の手がぴくりと動く。

若島「夏海？生きているのか？」

夏海がずっと立ち上がる。そして窓際に歩いていく。背中から蛸の足が出てくる。

若島、怯む。

誠、目を丸くする。

洋一、誠の手を引き、自分の方へと注意を向けさせる。

洋一「誠。（息を整えて）お前はどうかやら、乗っ取られてはいないようだな。いいか、俺の話を聞いてくれ。お前の知っている母さんはもう、いない。母さんは、乗っ取られていた。今、ようやくわかった。全部、やつらの計画だったんだ。俺たちは、はめられたようだ。この世界から、私が消えるようにと・・・。やつらの研究を主導したのは私だ・・・。その罰が当たったようだ」



誠「(黙っている)」

洋一「(笑って) やつら、俺たちを観察していたんだ。こっちがやつらを研究していたつもりだったが、実はその逆だった。やつらも俺たちを観察していたんだ。それに、やつら、俺たちに考える猶予まで与えやがった。だが、俺はどうやらそれを反故にしてみたらしい。若島さん」

若島「なんだ？」

洋一「もうやつらからは手を引きましょう」

若島「わかった。わかったから喋るな。体力を消耗する」

洋一「誠、お前は逃げる。逃げるんだ。どこか安全な場所へ・・・」  
と言って、意識を失う。

夏海が割れた窓から外に出ていく。

誠「母さん・・・」

と言って、夏海の後を追う。

#### ○東京タワー 建設用階段

夏海、どんどん上の方へと進んでいく。誠、階段を使って、夏海の後を追う。

鉄塔の先端にたどり着いた夏海の体に雷が落ちる。夏海の体が黒く焦げる。体が裂けて、そこから巨大な蛸が出てくる。

赤い、巨大な蛸が、東京タワーの先端に絡みついている。

誠「ああ・・・」

と言って、呆然と黒焦げの死体を見ている。

蛸の足が伸びてきて、誠が捕まってしまう。そして、変態後の夏海の体に取り込まれてしまう。

#### ○変態後の夏海の体内

蛸の体内。柔らかな蛸の内壁が、ときどき蠢いている。

誠、歩いていくと、玉ねぎ状の骨の牢屋の中に、夏海が座っているのが見える。

誠「母さん」

夏海「誠、誠なの？」

誠、牢屋に近づいていく。

誠 「大丈夫？」

夏海 「(少し間を置いて) もうダメだと思う」

誠 「きつと、ここから出られる」

夏海 「私はもう私じゃない。気がついたら、何かに体に乗っ取られていた」

誠 「地球外生命体だよ。親父が仕事で関わっていたんだ」

夏海 「そうだったのね。ようやく色々なことが腑に落ちる」

誠 「俺、あいつらと戦って勝ったよ」

夏海 「そう。さすが私とお父さんの息子ね」

誠 「早くここから出よう」

夏海 「私、乗っ取られてから、ずっと意識があった。私、あなたに嘘の電話をかけたみたい。お父さんは悪い人だって、あなたを殺そうとしているって、嘘の電話をしていた。止めようと思ったけど、止められなかった。私は意志が弱いからね、きつと。お父さんにも暴力を振るってしまった。だからお父さんは私を止めようとして、私の首を締めた……。お父さんは何も悪くない。私に乗っ取ったやつらが仕組んだことなの。そして、私は、ここから、お父さんやあなたにひどいことをしているのずっとと見ていることしかできなかった」

誠 「・・・俺は親父を撃ってしまった。母さんにひどいことをしたと思って。それに俺のことも殺そうとしているのではないかと思っていたんだ」

夏海 「でも、本当はそうではなかった。お父さんはいつでもあなたの味方だった。ただ、それが上手にあなたに伝わっていなかっただけ」

誠、俯いて小さく首を振る。

誠 「ここを出よう、母さん」

夏海 「それはできない」

誠 「どうして？」

夏海、背中を向ける。背中からへそのようなものが伸びており、それが地面とつながっている。へそのようなものは蠢いている。

夏海 「私はもうこの異星人の体と一体になってしまっている」

誠 「そんな・・・」

と言って、首を振る。

夏海「さあ、もう行つて、逃げるのよ。あなたはきつとうまくやれる」

誠、夏海に背を向けて、壁に向かって歩いていく。そして、壁に向かってナイフを突き立てる。それに合わせて、夏海のお腹の辺りからナイフの刃が出てくる。夏海が吐血する。誠がナイフを下まで引く。夏海のお腹のナイフも下まで伸びていく。誠が、ショットガンを乱射する。夏海の体に赤い斑点のようなものができる。裂け目から白い光が見える。誠がその白い光の中に入っていく。

#### ○東京タワー 建設用通路

タコの裂け目から、どろどろの透明な液体に包まれた誠が出てきて、床に倒れる。意識が朦朧とした表情になっている。

#### ○東京 東京タワーを俯瞰する視点(夜)

東京タワーの頂上に張り付いていた蛸がゆっくりと地上に落ちていく。

誠の声「俺は、父さんも母さんも殺してしまった」

#### ○東京タワー 建設用階段

誠、立ち上がって、階段を降りていく。

誠の声「これは、悪い夢なんだ。俺が見ていたのは、きっと全部夢だったんだ」

#### ○東京タワー展望台

洋一が倒れている。若島はいなくなっている。

誠の声「いや、夢なんかじゃない。俺はここにいる」

#### ○東京タワー 出入り口

誠が東京タワーの出入り口から出てくる。

出入り口を武装した自衛隊が取り囲んでいる。

誠、自分のこめかみに銃を突きつける。

武装した集団の中から、スーツの男が歩いてくる。

#### 自衛隊「総理！」

総理大臣、そのまま前に歩き続ける。誠の前に立ち、手を差し出す。

誠、銃を地面に落とし、うなだれて、総理大臣の手を取る。手を握った瞬間、誠が驚いた表情になる。総理大臣の瞳が、縦長の蛸のような目になる。

総理大臣「やあ、誠くん」

自衛隊をかき分けて、ET2がやってくる。

総理大臣「私は、君にチャンスを与えることにするよ。決着をつけようじゃないか」

ET2、誠の姿に擬態する。

○【ゲームパート】東京タワー 出入り口 誠に擬態したET2戦

クリア条件…ET2に一定のダメージを与えること

○東京タワー 出入り口 誠に擬態したET2戦後

ET2、倒れる。

総理大臣、前に出る。

誠、総理大臣に銃を向ける。

自衛隊、誠に銃を向ける。

総理大臣、それを制止する。

総理大臣「もう終わった。終わったんだ」

と言って、握手するようにして手を伸ばす。

誠、自分の額に銃を向ける。

総理大臣「よせ」

暗転する。

誠の声「この世界でいちばん怖いものって何だ？」

(スタッフロールでは、フランツ・リストの『ラ・カンパネラ』を流す)